サントリーの愛鳥活動

身近な鳥たち
— やさしい見わけ方 —

あの鳴き声は？ あそこに向かっているのは？ ふと見た鳥の名前を知ることはバードウォッチングの楽しみのひとつ。そこから鳥の世界がひろがっていきます。目で、耳で、身近な野鳥を知ることからすこしずつはじめてください。
ポイント①は「からだ」。②は「声」。③は「見られる時期・季節」。④は「すんでいる場所」。このリーフレットは、都市のまわりで見つけられやすい鳥を中心に、種類をえらびました。これらの鳥を見つめることを通じて、自然を、環境をいろいろ考えてくれればさいたいです——。

水と生きる SUNTORY
野や山の鳥たち

野鳥は、手にとって図鑑と見くらべることはできません。そこでまず、スズメとかヒヨドリとか、どこにもたくさんいて、見る機会の多い鳥に親しんで、それから少しずつがった鳥を「らべて」いくと、鳥を見わける楽しさといっしょに、「自信」がついてきます。むずかしく考えないので、らくにらくにいきましょう。

鳥の名前の次にある白文字は鳥のいる時期をあらわします。

- 一年中いる 日本で繁殖し、日本にずっといる鳥。
- 冬だけいる 北の外国からきて日本で冬を越し、春に帰る鳥。
- 夏だけいる 南の外国からきて日本で繁殖し、秋になると渡っていく鳥。

スズメ

人がすんでいるところなら黒いほう
茶色の頭で
チュンチュン

オオスズメも同じ色

スズメはハネあるく

大きさ13.5cm。人間がすんでいるところによくいる、私たちにいちばん身近な鳥でしょう。小さな庭にも路地にも、茶色の頭と、ほおの大きな黒いネコクロの彼らがいて、チュン、チュン、ジュジュと鳴いています。めずらしくないから見つめる人はほとんどいませんね。都会のスズメは体がススけています。でも繁殖期の田舎（いか）のスズメはきれいな赤茶色。この時期に、親が子に食べさせるエサは、ほとんどが虫。それでも、農作物につく害虫なのです。スズメをちょっと見なでおしてください。そうすると、これから展開する鳥のおはなしが、もっと面白くなるはず。

一年中いる
ホオジロ

スズメよりやや大きめ。スズメに似ていますが、市街地にはまず、農耕地ととが荒れやすい林に。ほうがが白いからホオジロといいますが、よく見ないとわかりません。それよりも赤茶色のほうが、黒っぽい茶色の頭のほうが見わけやすいポイントです。チチと二声で鳴き、あたり高くない木のつっくねで、よく通る澄んだ声でチチーピーチチーピーと胸張ってさえずって小鳥がいたら、まず、ホオジロです。

オオス

メス

オオスとメスのちがいはわずかですが、メスには顔に黒みがなく、茶色と白色のもようです。

カシラダカ

スズメくらい。冬鳥として渡ってくる。茶色っぽい地味な鳥です。ホオジロと違うところは、白いはら、絵のように、ときどき頭のつつねの羽毛を立てることからカシラダカの名がついたか。1羽だけであることは少なく、数羽で見られしきのない木に集まり、畑、草地、ひらけた林の面などでエサをとります。高い声でチチと鳴きます。春はヒバリに似たさえずりでうたいます。北海道や雪のつまる場所は通過します。

オオス

メス

ときどき頭の毛を立てながら見られしきのない木に集まって

アオジ

スズメよりやや大きめ。中部地方より北の山のなかで繁殖し、冬は雪のない平地へおりてきます。市街地の庭にくることもあります。やぶのある林にすんでいます。とても地味な体なので、うすくらいうすべること面にいるとかなかなか見えませんし、アオジはそんなところが好きなのです。鳴き声はツツと小さい。さえずりはゆっくりと複雑。
カワラヒワ
スズメぐらいですが、全体にスズメよりふとめ、くすんだグリーン色、ふとて短い大きめのくちばし、林、畑、河原や、市街地でも一年中見られます。飛びながらキリコロと鳴き、つばさの黄色いもようがチラとすけて見えます。木の上べんや電線などにとまって、キリコロのあいだにピクニックを入れます。繁殖するのがすと群れをつくり、数羽から数百羽で鳴きながら飛ぶときはにぎやかです。

オスとメスのちがいは
わずかですが、
メスは頭と背の緑色が
なく茶色です。

シジュウカラ
スズメより少し小さい。黒い帽子に白いほお、首から胸にしたら黒いネクタイと、はっきりした特徴があります。しかも活発に動きますからよく目につきます。山の枠のほか公園にも市街地にも、雪のある地方にも。鳴き声はかなりはっきりとジクジクジクジク、シチピー、チーチーチーなど、さえずりはチャービーチーピー、ツツビンツツビンをくりかえします。繁殖期以外はよく群れをつくります。市街地にかけた巣箱にもよく入ります。

白いほっぺた
黒ネクタイ
せっせと
動いている

メス

オス

オスもメスも
ほとんど同じ色

外国の鳥学者の計算による
と、シジュウカラ成鳥1羽が
1年間で食べる虫は約12万
5千匹。ヒナが両親からもら
う虫は1羽1羽あたり50匹。
1つがいが年2回繁殖して
12羽のヒナを育て、それぞれ
成長して…一家が1年に食べ
る虫は300万匹近くとか！
ヤマガラ

スズメくらい。体にくらべ頭が大きい。あざやかなレンガ色がよく目立ちます。鼻にかった声で、ツツニーニー、ツーツーッーとしげしげとアガリに鳴きます。さえずりは、ややふといにこだ声でツーツーピピーとシジュウカラよりもゆっくりとくらかえします。広葉樹の林を好みます。

エナガ

スズメよりも小さく見え、スプーンの柄（え）のような長い尾が特徴。名前の由来は、北九州の方言で、尾の形に似ているためです。尾があがると、とても軽い飛びaccionesをすることができ、尾が長いからこそやさしい音で鳴くのです。春に群れで飛び交うのもみじの木の中です。

ウグイス

だれでも知っているホーコーキョ、ケキョケキョとさえずる鳥ですが、名は有名でもやぶこのがなにいることが多いので見つけるのはなかなかむずかしいのです。全体に灰色がかかった黄緑に茶がまぎれ、やぶこのかにふさわしい色をしています。冬は雪のない平地へおりてくるので、都会で見ることもしばしばです。冬の鳴き声はチャッチャッと舌をすするようにくりかえします。
メジロ

スズメよりも小さい。目のまわりの白い輪、緑色の背があざやかで、お菓子のウグイスモチの色。そんなところから、メジロをウグイスと思っている人もいるようです。細長いくちばしでツバキなどの花の蜜を集め、果実をついばみ、虫をとります。つがいや群れでいることが多い（ウグイスは群れません）。枝にならんでとまっているほとんどから「メジロ押し」なんてことばも。鳴き声はチー、さえずりは複雑で長い。林、庭木のある住宅地などにすんでいます。

ジョウビタキ

スズメくらい。人間のまわりや、ひらけた土地にやってくる冬鳥です。丸っこい体に大きな黒いひとみ。つばさに大きな長い点と、腰と尾のだいだい色。オスの目の下からの色が黒出し、頭も白か灰色です。とまっているときは、ピヨコットおじぎをするようにして、尾をふるわせます。ヒッピっとするどく鳴き、あいままに尾をふりながら低くカッカッ、またはカタカタと腰をふって音を出します。
ヒバリ

スズメより大きいかなり大きい。冬にはあたたかいところへ移動します。ひらけた草原や畑、市街地に近い河川敷のフラウドの草のある地上で暮らします。晴れた日、空高くピーチュル、ピーチブなど、にぎやかにさえずりながら飛んでいる姿は春の景色でしょう。全体に地味な褐色。細長い体にひろいつば。ときどき頭の羽毛を立てます。スズメをはじめ多くの鳥がやるようなピョンビョンあるきではなく、ムクドリと同じように足を交互に出してあります。

モズ

スズメよりかなり大きい。山地では夏、平地では冬、ひらけた林や人家の近くにいる、小型でも肉食の鳥です。エサをちぎるように適したするどいかぎ形のくちばし。茶色の頭に灰色の背、丸っこい体、ゆっくりとふりまわす長めの尾。枝から枝へ移ってはキチキチ、チョウドンと鳴き、秋はキイキイと高鳴き。ぼかの鳥の声をまねることも、とらえた獲物（えもの）を枝にさしておくハヤニエは有名な習性。

オスとメスのちがいはわずか、メスは目黒い線がうすい。メスは背の灰色がなく茶色、つばさの白斑もあります。胸、はにあふれゆきましょう。
ヒヨドリ

くちばしから尾までの長さ約27cm。灰色の体、ぼさぼさの頭、茶色のほう。長めの尾に細長いくちばし。ピー、ピーグと、笛のような高い声。さえずりはピーピーピーユーリ。低い山の林から市街地まで、かならずといてよく見られる鳥です。飛び方はなかなかスマートで、つばさをひろげたり閉じたり、やわらかな上下動が波のかたちに見えます。花の蜜が大好物。夏北海道にいるものは冬には南へ群で移動します。

ムクドリ

くちばしから尾までの長さ約24cm。田、畑や果樹園などの地上においてエサをとぎ、市街地の芝生などにも。尾の短いズングリ型で、白い顔、オレンジ色のくちばしと足。飛びと先のとがった三角のつばさと白い腰が特徴。ノコノコあるいはエサをとり、チッ、ジェー、ギュルギュルなどと鳴きます。夏から冬、春にかけて大群をつくり、電線や木にとまります。
ツグミ

ムクドリと同じくらい、とまっているときは体を張り、つばさを下げた姿が特徴的です。冬、広い芝生などひらけた場所で見られます。地上で落ちた枯葉のなかの虫をさがしているのがよく見られます。頭部から胸にかけて黒い点々。腰とつばさが茶色。シューと鳴くほか、クイクイ、クッククエっと二声ずつよく鳴きます。飛び立つときはまず鳴いてから。

キジ

ニワトリくらいの大きさで尾が長く、全長（くちばしから尾の先まで）オス81cm、メス58cm。繁殖期、オスはこんなにあざやかで、メスはなかなか見つけにくい地味な色です。平野の草原、農耕地、河原などにいます。オスは繁殖期、クォクォー、またはケッケンなどと大きな声で鳴き、つばさをぱぱたきます。

コジュケイ

ハトよりひとまわり小さく、まるっこいオレンジ色の体に栗色の顔、灰色の胸、はらとつばさの黒い点々。やぶのなかを何羽かで連れて歩いてきますが、なかなか姿を見せてくれません。見たことがない人も、林のなかや市街地の公園の奥からチョットコイ、チョットコイ…と大声で鳴くのをきいたことがあるでしょう。中国から輸入し、狩猟の獲物として放鳥しました。
キジバト
いわゆるヤマハト。市街地にも多くなりました。ブドウ色の体にウロコ模の背中、首に青白黒のしま。飛ぶと尾に白っぽい線。鳴き声は眠そうにデデッポポー。

ドバト
お寺や神社や公園でおなじみのハトポポポ、この鳥。実はデンショバトなどが野生化し失番もとして、野鳥の図鑑などにはとりあげられていますが、文字通りの身近な鳥としてよく見ていたくなる新登場！白、黒、茶色、灰色など体色はいろいろです。

コゲラ
スズメくらいのちいさなキツツキの仲間。こげ茶色と白のマダラもいます。垂直にすばやく移動し、尾で体を支えて木の幹にとまり、じょうぶなくちばしでコツツキつついてなかの虫をたべます。ギーーとけいじゃる、キイッキイッ、またはキョッキョッキョッとも。森林の鳥ですが、最近は都市の公園の森にもよく見られるようになりました。

カケス
ハトと同じくらい、林の上などをフワフワゆっくり飛んでいる姿はたいへん特徴があります。それに、ジェー、ジェーというごたった鳴き声でもよくわかります。体もはげているような頭、つばさの青と白が鮮やかで、すどい目つきとともに、見わけやすい鳥のひとつといえるでしょう。
トビ
ビーヒヨロピーという鳴き声はよく知られていま
す。全身こそ茶色、つばさに左右対称の淡
色斑点があり、パチ型の尾をしたトビは、日本
のどこにでもいるタカの仲間です。死んだ動
物を食べ、何羽も集まってねぐらをつくり
ます。「飛ぶ」から「トビ」だって…ほとんどし
ら？ ずばから鳥まで60cm前後あります。

ハシブトガラス
スズメとともに、人間が生活するところ
にはかならず顔を出す雑食鳥サン
です。56cmくらい。くちばしがふとくく、
おでこが出っ張った感じです。鳴き声
はガァガァとおでこからときに鳴きま
す。朝、
夕、ねぐらの出入りに飛び込むのも、けっ
こうちからするとよいですよ。くちばしがふ
ときからハシブトガラスなんですね。

ハシボソガラス
こんなガラスもいるの、ごぞんじで
したか。ハシブトガラスよりも小さ
めて、くちばしも細め。鳴き声もガー
アッ、ガーアッ、とにごっています。
鳴くときは体を上下に、農耕地、河
川敷などで見られ、都会では少な
いガラスです。
川や池の鳥たち

川、池、沼、河口、干潟、海辺などは、森や林にくらべてずっとひらけているところですから、はじめて野鳥を見る人でもすぐに見つけられます。とくに冬は、群れをつくる鳥が集まっていますし、なかでも水鳥はわりあい大型でじっとしていますから、見逃すことができません。じっくり腰をおろして図鑑と見くらべることもできます。夏は帽子、冬は防寒を忘れずに。

鳥の名前の次にある白文字は鳥のいる時期をあらわします。

[画像]

一年中いる 日本で繁殖し、日本にずっといる鳥。
冬だけいる 北の外国からきて日本で冬を越し、春に帰る鳥。
夏だけいる 南の外国からきて日本で繁殖し、秋になると渡っていく鳥。

ツバメ

夏だけいる

オスもメスも同じ色ですが
オスは尾が長い

オーストリアに燕尾服を思いつかせたスマー
トナ体。レンガ色ののど。夏鳥としてやってきて、人家の軒下などにお
わん型の巣をつくります。一部には
越冬するものも。チュビーとするど
い声。さえずりはチュチーchu chu chu
ピジクピジピー。ひらけた水辺な
どで、飛びながら虫をとります。その
家の最も人通りの多い軒下に巣を
つくります。
イワツバメ

スズメくらいの大きさで、ツバメよりずんぐりしています。短い尾、腰とは白。建物や洞窟（どうくつ）に、集団で深いどんぶり型の巣をかけ、その周りの水辺などでエサをとります。朝夕、いっせいに飛び出し、巣に入るところは見ものです。鳴き声はジュルルッ、チュビッ。

カワセミ

スズメより少し大きい程度ですが、魚をとるのに都合のよいちょっと長くふといので、大きく見えます。川や池、沼にすんでいます。水面を青いものがまっすぐ飛んでいたら、この鳥です。背中の青緑色、はらばはレング色というあざやかさ。とまり木にいるときは体をひょこっと上下させ、とまり木のないところでは、空中の一点でつばさをはばたいて静止して魚をさがし、見つけるやいなや水中にダイビングして魚を上手につかまえます。
ハクセキレイ
河川、公園の水辺など、いそがしそうに尾を上下にふってあるいています。スズメより大きくヒヨドリより小さい、胸が黒くて、白い顔に眼を通る黒い線。ひらひらと飛ぶと白黒のつばさが目立ちます。そのときチュチュンと鳴きます。冬は集団で川底の木立ちや、橋げたの下でやすむのです。最近は駅前ビルの窓ガラス、ネオン看板の下などにぎやかなところでもねぐらが見つかっています。都会派ですね。

セグロセキレイ
ハクセキレイとちがうところは、全体に黒っぽく、とくに頭の下から胸、背中が黒いこと。ハクセキレイよりはやや自然派で、石の多い河原などで見られます。ジジジジジジとごった声で鳴き、さえずりはジージチチロジーなど。動きはハクセキレイと同じ。世界中で日本にしかすんでいません。

キセキレイ
上の2種類とちがうところは、黄色いはら、灰色の背、ややスマートかなという感じ。渓流や河川、夏には山奥の細い流れにもすみます。チチン、チチンと鳴きます。
コサギ

あまり深くない水のあるところで、エサをねらって走ったり、足をふるわせで小動物を追い出したりしています。都会にもすいているため、飛んでいるのをよく見ると、首を折りまげています。サギの仲間は、みなこのかたちで飛びます。大きさは60cm。

一年中いる

ゴイサギ

背中は青味をおびたくらい灰色で、全体にズングリムックリしています。若いゴイサギは全体が褐色で、点々があります。この鳥は水辺でジャックとしています。集団で林繁殖します。ひるは林のなかや草原などでやすみ、夕方からエサをとりに出かけます。飛びながらクワッと鳴きます。夜行性。

一年中いる
カイツブリ

カモを見ていると、この鳥がよく顔を出します。カモの子供と思っている人もいますがなぜこんなに種類。アチラへもぐれコチラへ浮くという、上手な潜水で魚をとります。夏羽ではおもから首の前にかけ淡い栗色、くちばしの先は黄白色、眼はきれいな黄色です。冬羽では全身黄色みのあるうすい茶色です。アシなどを枝柱にして水草を積み上げて浮き巻をつくります。夏には、うす茶色のしま模様の毛玉のようなヒナをつくれているのが見られます。大きな声でケレレレレと鳴きます。淡色域の鳥です。

ユリカモメ

カモメの仲間では小型で40cmくらい。さまざまな水辺で、群れで暮らし、水上、空中生活が上手です。背中にうすい青灰色がありますが全体に白っぽく見え、それだけにくちばしと足の赤が鮮かに目立ちます。冬は眼のうしろに黒い点がありますが、夏になると、チョコレート色の頭布をかぶったようになります。声はギューイ。
マガモ

冬鳥として日本へくるカモは、はじめオスメス同じ羽根ですが、オスだけがコロモガモをします。それぞれ、メスと良いカップルを組むための、越冬中の大切な事業なのです。アオクビといわれるこのマガモのオスもこんなに色彩がはっきりしていますが、メスは地味です。北海道など北の一部の地方では少数が繁殖しています。夏になってもこのマガモに似たまとまり大きいのが公園の池などにいますが、マガモを飼育改良したアヒルです。

オナガガモ

名前のとおり、尾の長いカモ。とくにオスの尾は長くスマートです。頭がチョコレート色で、胸から首すじにかけて白。水面にさか立ちしてエサをとるかっこうはとてもユーモラスです。鳴き声はプリプリッ、ピューなど。メスはこんなに地味です。
カルガモ

一年中いる

アンなどの多い水のあるところにいて繁殖します。黒いくちばしの先が黄色いのは、カルガモだけの特徴ですが、オスメスとも全体にこげ茶色で区別がむずかしい。ヒナの世話をメスが行います。夏、ヒナを連れて浮いているのはかわいいものです。声はゲェッゲェッとごった感じで鳴きます。

コガモ

冬だけいる

冬のカモたちのなかではいちばん小さい鳥です。オスは栗色の頭、緑色の眼のまわり、クリーム色のお尻の三角が見わけのポイント。オナガガモなどは人になついてそばまで来ますが、コガモは用心深く、人間にあまり近づいてきません。鳴き声はオスがピリッ、メスはクエークックッ。一部の地方で少数が繁殖しています。
サントリーの愛鳥活動

Today Birds, Tomorrow Humans.
「いちばん大切なものを、未来へ」
—想いは鳥へ向かう—

今日、鳥たちを襲う不幸は明日、人間の身に降りかかるかもしれないと。鳥たちに起こる幸福は、明日の人間を幸せにするかもしれない。

サントリーはそんな想いをもって1973年からこの活動を続けています。野鳥を見つめ、環境を知る。その気づきを通じて、鳥や人、さらにはすべての生きものが豊かに暮らせるフィールドを明日に届ける、

それがサントリーの愛鳥活動です。

日本の鳥百科

きれいなイラスト&解説付きの鳥辞典。鳥の鳴き声も200種以上聞くことができます。見て聞いて読んで楽しみながら愛鳥活動にご参加ください。

ホームページ▶ http://suntory.jp/BIRDS/

イラストレーション・水谷高英 監修・柳澤紀夫 元（公財）日本鳥類保護連盟 理事
出発前の準備

・双眼鏡、手帳、筆記具、図鑑など道具類は、すぐに使える状態ですか。
・自然のなかでは、目立たない色彩の服装がよいのです。（赤・黄色など目立つ警戒色は鳥にもよく見えています）。
・野外で怪我などに対応できるよう長袖、長ズボン、帽子は必要です。足元はしっかりした履物で出かけましょう。
・目的地への地図、交通手段の確認を行います。

野外へ出たら

1 鳥への配慮

・鳥をびっくりさせないように、近づき過ぎない距離で見ましょう（驚かして飛びたててしまうのないように）。
・鳥は動くものに敏感ですので走り出したり、腕を伸ばしたりなどの急な動き、大きな動きをしないようにしましょう。
・鳥は音に敏感ですので大きな音をたてたり、おしゃべりをしないようにしましょう。

2 自然への配慮

・足元の草花、虫など回りの自然にも目を向けましょう。草花、虫などは採（捕）らないように心がけ、もし捕らえたら観察後に放しましょう。
・ゴミは必ず持ち帰りましょう。

3 人への配慮

・私立地、田畑など入ってはいけない場所での観察はやめましょう。
・ほかのウォッチャー・通行人・通行車の迷惑にならないように、行動しましょう。

帰ってからの整理

・鳥の観察記録を整理し、次回以降の課題の確認をしておきましょう。
・道具類・履物などの手入れを行います。

（2019年11月現在）